

# かわ あらわ 川に現れたトラ

「体を低くして、モーバ！ いい子だ！」  
ビルマ人の少年 ディーディーは、自分のソウ  
の背中によじ登り、頭をやさしくポンポンと  
たたきました。

ディーディーは、ゾウのモーバが赤ちゃんだっ  
た時から調教してきました。アジアゾウのモー  
バは、いとこのアフリカゾウほど大きくはあ  
りません。モーバは、おとなしくてやさしいゾ  
ウでした。みんな、モーバが村に来ると喜ん  
でくれました。モーバをこわがる人は、だれも  
いません。ディーディーがきちんと調教してき  
たので、モーバはまちがって物や村人をふん  
でしまったりすることはありません。

「今日は川に行くよ、モーバ。水浴びが必  
要だからね。」

モーバは、川に行けるのがうれしくて、いそ  
いそと林の中を通りぬけていきました。長い  
鼻を持ち上げて、パオーツと音をあげました。

モーバが森の中を進むと、周りにいた鳥  
たちが木々の間から飛び立ち、上の方にい  
るサルたちは、キャツキャとさわぎました。モー  
バは早く川に行きたくて、どんどんつき進ん  
で行きました。そして、ついに川に着きました。  
モーバは鼻を持ち上げて、3回、パオーツと  
音をあげました。



「わーい、水だー！」 ディーディーは笑いながら、うれしそうに さげびました。

モーバがうれしい時はいつも、ディーディーまで うきうきしてきます。

モーバは水の中に ザブザブと 入って行って、長い鼻で水を飲み始めました。

ディーディーは、自分の大切なゾウを洗い始めました。そして、体にこびりついた  
どろや小さな虫を洗い落としました。その間モーバは、めいっぱい水をバシャバシャして  
楽しんでいました。

ふと、ディーディーは、鳥たちがみんな いっせいに静かになったことに気が付きました。

それで、すばやく林の方を見渡しました。鳥たちが飛び去り、サルたちがさわいで木の  
高い方へ登っていくのは、トラが近づいているしょうごと、父親から教わっていました。

ディーディーの心ぞうは、ドキドキし始めました。モーバも、鼻を右に左にと  
ふり始めました。落ち着かず、移動したい時には、そう するのです。

「よしよし、モーバ！ だいじょうぶだからね。落ち着いて。」

そう言いながら、ディーディーはモーバの鼻をやさしくたたきました。

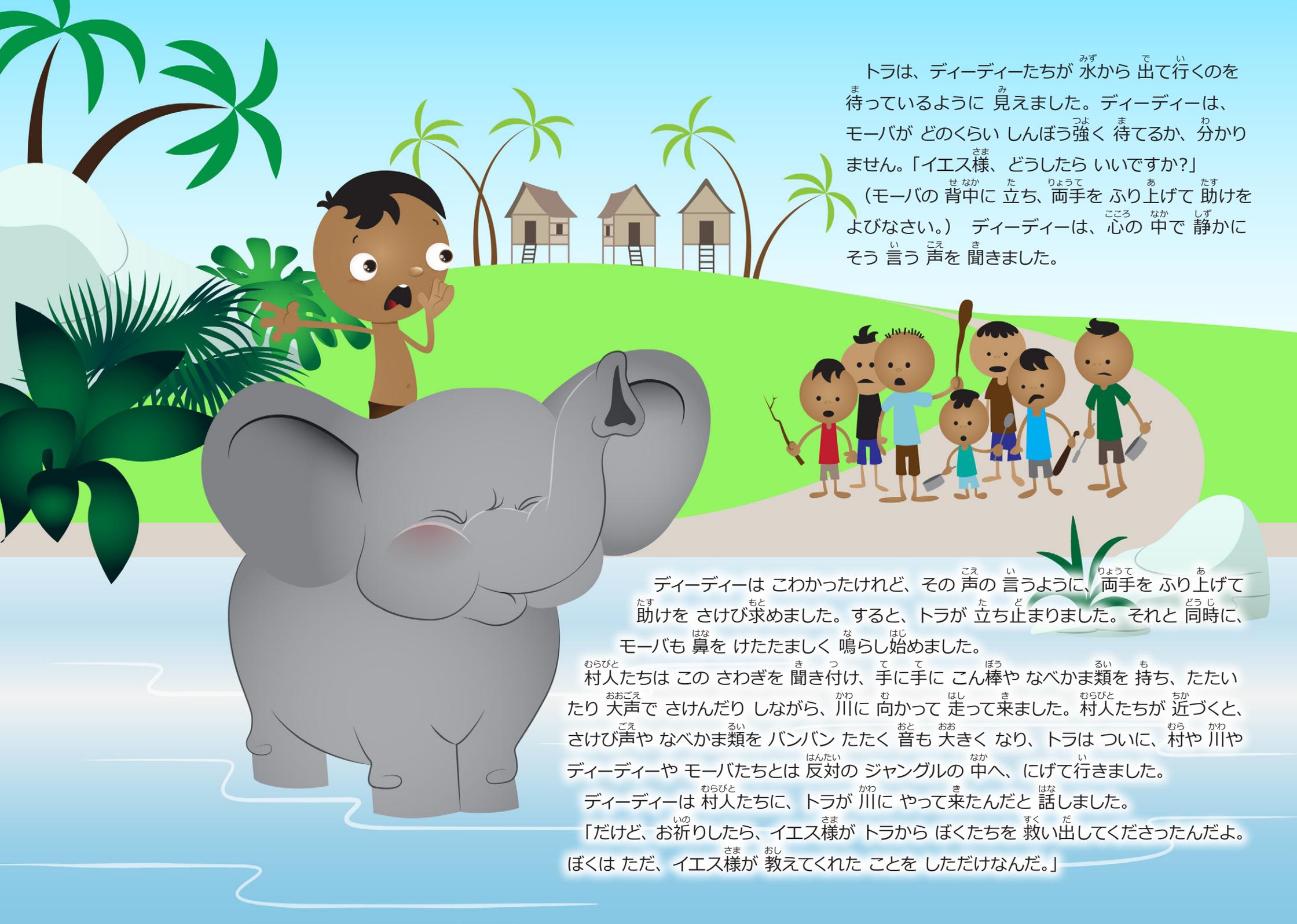


ディーディーはモーバの背中によじ登って、ジャングルの中をもっとよく見ました。  
すると、川の向こう側の林の中で、何かが動いています。でも、それが何かはよく見えません。

(おそらくは、ケガでもしたサルなんだろう。)と、ディーディーは思いました。  
ですが、ちがいました! うなり声が聞こえます。サルはうなりません!

ディーディーはこわくなりました。それで、こういう時にするようにと父親から  
教わったことをしました。お祈りをしたのです。「イエス様、どうか、  
モーバやぼくに、何も起こりませんように。モーバがこわがりませんように。」

トラは水を飲もうとして、近づいてきました。けれども、モーバとディーディーが  
川の真ん中にいるのに気付いて、立ち止まりました。トラは、非常にお腹がすい  
ている時には、ゾウにおそいかかることもあります。このトラがお腹をすかせて  
いるのかどうか、ディーディーには分かりません。



トラは、ディーディーたちが水から出て行くのを待っているように見えました。ディーディーは、モーバがどのくらいしんぼう強く待てるか、分かりません。「イエス様、どうしたらいいですか？」  
(モーバの背中に立ち、両手をふり上げて助けをよびなさい。) ディーディーは、心の中で静かにそう言う声を聞きました。

ディーディーはこわかったけれど、その声の言うように、両手をふり上げて助けをさけび求めました。すると、トラが立ち止まりました。それと同時に、モーバも鼻をけたたましく鳴らし始めました。  
村人たちはこのさわぎを聞き付け、手に手にこん棒やなべかま類を持ち、たいたり大声でさけんだりしながら、川に向かって走って来ました。村人たちが近づくと、さけび声やなべかま類をバンバンたたく音も大きくなり、トラはついに、村や川やディーディーやモーバたちとは反対のジャングルの中へ、にげて行きました。  
ディーディーは村人たちに、トラが川にやって来たんだと話しました。  
「だけど、お祈りしたら、イエス様がトラからぼくたちを救い出してくださったんだよ。ぼくはただ、イエス様が教えてくれたことをしただけなんだ。」

ディーディーは、<sup>かみさま</sup>神様が <sup>じぶん</sup>モーバと <sup>まも</sup>自分を <sup>い</sup>守ってくださったので、うれしく なりました。もし <sup>で あ</sup>また <sup>おも</sup>トラに <sup>おも</sup>出会ったら、ディーディーは どう <sup>おも</sup>すると思いま  
すか？ <sup>いの</sup>きっと、<sup>いの</sup>祈るでしょう。

<sup>むらびと</sup>村人たちが <sup>むら</sup>みんな、<sup>しごと</sup>村の <sup>い</sup>仕事をするために <sup>みず</sup>もどって行くと、<sup>なか</sup>モーバも <sup>あ</sup>ゆっくりと <sup>いえ</sup>水の中から <sup>かえ</sup>上がって、<sup>はじ</sup>家へ <sup>かえ</sup>帰り始めました。

ディーディーは <sup>たの</sup>楽しそうに <sup>はなうた</sup>鼻歌を <sup>うた</sup>歌いながら、<sup>の</sup>モーバに <sup>なか</sup>乗って <sup>かえ</sup>ジャングルの <sup>い</sup>中を <sup>かみさま</sup>帰って行きました。神様を <sup>あい</sup>愛し <sup>たす</sup>助けを <sup>もと</sup>求める <sup>ひと</sup>人たちには、<sup>かみさま</sup>神様が  
<sup>たす</sup>すばらしい <sup>じよげん</sup>助けと <sup>おく</sup>助言を <sup>かんが</sup>送ってくださるんだなあ <sup>かんが</sup>と考えながら。

<sup>むら</sup>村に <sup>ちか</sup>近づくと、ディーディーは <sup>あたま</sup>モーバの <sup>い</sup>頭を <sup>い</sup>やさしく <sup>い</sup>たたいて <sup>い</sup>言いました。「おいで。えさを <sup>ほ</sup>あげるからね。」ディーディーが <sup>くさ</sup>モーバに <sup>あつ</sup>干し草を <sup>あつ</sup>あげ  
ると、<sup>むら</sup>村の <sup>こ</sup>子どもたちが <sup>さっそく</sup>早速 <sup>ぼうけんばなし</sup>ディーディーの <sup>き</sup>冒険話を <sup>まわ</sup>聞こうと、<sup>あつ</sup>周りに <sup>あつ</sup>集まってきたのでした。

お  
終  
わり

